



# 『IAS ロンドン会議雑感』

総務省統計研修所長

古 田 裕 繁

昨年8月27日から29日に開催されたIAS（国際官庁統計協会）の2002年ロンドン会議に参加した。今回の大会は、『官庁統計とニューエコノミー』のテーマに基づいて、英国国家統計局主催の下、ロンドン中心部のチャーチハウスにて開催され、参加者は約70カ国、約350人であった。

チャーチハウスはウェストミンスター寺院や国会議事堂に隣接するロンドン中心部に位置する。元々ビクトリア女王の在位50年を記念して1887年に建てられたものだが、1930年代以降英國教会の所有となり、会議施設として利用されている。第2次大戦中は上下両院に使用され、チャーチル首相のいくつかの歴史的な演説もここで行われた。また、1945年国連第1回準備委員会・安全保障会議も開催された歴史的施設である。現在は、大ホールの他、いくつかの小ホールを備え、空調・オーディオ設備などが完備された近代的会議施設として利用されており、快適な環境であった。こんな会場設定からも主催者の意気込みが伝わってくる。

会議は、大きく『ニューエコノミーとは何か?』、『政策的な意味と統計の必要性』、『ニューエコノミーによる事業変革』、『ニューエコノミーの測定』の4つのサブテーマに分かれ、それぞれに1つの基調講演といくつかの招待論文のセッションで構成されていた。この他に、寄稿論文のセッションもあり、基調講演以外は3~4セッションが同時に進行した。

日本の1990年代は「失われた10年」と言われるようにならざる状況であったが、米国等は情報通信を中心とした技術革新によって経済が持続的に成長し、しかも生産性向上によってインフレもなく、経済はもはや好況と不況を繰り返す景気循環を乗り越えた新しい段階に至ったと言われている。これが「ニューエコノミー」である。最近の米国を見ると、ITバブルの崩壊などでちょっと色あせた感じもあるが、この新しい現象を、人により、切り口によって「デジタルエコノミー」「ナレッジエコノミー」「IT社会」等々と呼んでいる。官庁統計との関連では、これらの現象を把握する必要性、とらえる枠組み・体系、測定方法（特に生産性の測定）などが盛んに議論されている。

招待論文セッションは、論文発表（概ね2人）、ディスカッサントからの講評、会場内からの質疑応答の順に進行された。また、寄稿論文セッションは、論文発表（概ね4~5人）と会場内からの質疑応答の順に進行された。プレゼンテーションは基本的にパワーポイントを中心であった。特に招待論文セッションについては、事務局が事前にテンプレートを配付し、各発表者のスライドの背景を同じものにしていったので、会議全体を通して統一感があり、好ましかった。

寄稿論文セッション『ICTの測定』において、小生が『日本におけるIT統計の最近の動向』を、

また、招待論文セッション『商品・産業分類』で統計基準部松尾副統計審査官が『日本標準産業分類の改訂について』発表した。

参加者は場所柄、欧州中心だが、今回のテーマに関しては、北欧諸国やカナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどが元気がいい。また、最近の民族主義運動の高まりを受けてか、バスクなどが発表を通じて存在を主張しているのが印象に残った。

国際会議には、学術プログラムのほかに社交プログラムも用意されている。これも主催者の腕の見せ所である。初日夜にはシェークスピアの劇で有名なグローブ劇場でレセプションが開かれた。2日目夜は、ロンドンブリッジ、タワーブリッジなどをくぐり、テムズ川を世界標準時でおなじみのグリニッジまで船で下った。そこで天井壁画の描かれた歴史的建造物（Painted House）の中においてディナーが開催された。そこは今は海軍士官学校の施設になっていて、食後は中庭で軍楽隊によって特別に演奏会も催された。

ロンドンは約15年振りであったが、前回と比べても、成熟した都市は余り時間の流れを意識させなかった。しいて変わったところを挙げると、ロンドンアイという大きな観覧車が会議場周辺からでも大きく見えることと、赤い2階建てのダブルデッカーやブラックキャブ（タクシー）の側面に広告が増えたのが目に付くことだ。

3日目の夜は木曜日で、大英博物館が8時半まで開いていた。古代中近東やエジプトの遺跡巡りをすることができ幸運であった。この博物館の中庭も、今回、ガラス張りの巨大ドーム、グレートコートで覆われていたが、これもミレニアム記念ということであった。

最終日出発までのわずかの時間、バッキンガム宮殿を訪れた。夏の時期だけ内部の迎賓施設を一般公開している。今年は特に女王在位50周年記念で盛大だそうだ。小生前職が迎賓館勤務だったこともあり、我が国的一般参観と比べて非常に興味深かった。日本は、事前申込制で無料であり、職員が対応している。英国は外郭団体が主催しているようである。当日券もあるが、時間指定で有料である。部屋の規模でも、絵画のコレクションの多さでもかなわない。参観中に女王の公式訪問先をリストアップしたコーナーがあり、1975年日本とあったのを見逃さなかった。その年、女王は国賓として新装なった我が迎賓館にお泊りになり、庭にオークを植樹されたのであった。その樹も今では大きく育っている。宮殿内にはロープを張って、あちこちに職員が立っている。その中の一人に、そんな話をしたら、興味を持って是非日本に行ってみたいと言っていた。一番驚いたのは出口のお土産売り場だ。何にでも王冠をつけて売っている。犬の食器、首輪、リードにも王冠をプリントしたものがあったが、あれは英国人のジョークだろうか。